女子短大生の自己表現と衣服の関連

On the relation between clothig and self-expression of college women

伊　藤　きよ子
Kiyoko ITOH

I　はじめに

多くの人々は，他者との関係において快適であろうとする。そして，その快を得るために，しばしば注目（ここで言う注目は，人が我々に気付き，その存在を知るという程度のもの――承認など――を含む）される態度をとることになる。

注目を得るための手段として最も身近なものは，言語であるが，我々はその他の媒体によって注目を得ようとすることが多い。

本研究は，このような媒体を通しての自己表現に着目し，媒体として，女子短大生が最も関心を抱いていると考えられる衣服をとりあげた。

中川（1986）は，さまざまな生活場面で着装する衣服を選択する際に，女子大学生が考慮する着装基準の構造を解明し，被調査者の類型化について報告している。また，藤原（1982）は女子大学生の衣服の関心度について調査し，同時に，どのような自尊感情をもつ人が，衣服のどのような側面に関心をもっているかを検討している。

本研究では，これらの報告を踏まえ，女子短大生の着装基準，衣服関心度合を調査することにより，衣服は彼らが自己表現をするうえでどのような役割を果たしているかを検討した。同時に自己概念の測定を実施し，衣服と自己表現の関係は自己概念により差があるかを検討した。

II　調査方法

1　調査対象

名古屋市内にあるA公立短大1，2年次生66名，T私立短大1年次生57名，合計123名である。A短大は夜間部であり，昼間は何らかの職業をもっている者が多い。この2校の学生を調査対象とした理由は，勤労学生と普通学生の間に差があるかをみるためである。調査対象者の年齢，職業は表1に示した。

表1　調査対象者の属性

人数、（　）内は%

		A短大	T短大	計
年齢	18歳～19歳	56 (84.8)	55 (96.5)	111 (90.3)
	20歳～22歳	10 (15.2)		10 (8.1)
	N. A.		2 (3.5)	2 (1.6)
職業	事務職	28 (41.2)		
	販売職	7 (10.3)		
	サービス職	12 (17.7)		
	専門技術職	9 (13.2)		
	技能労務職	2 (2.9)		
	無職	4 (5.9)		
	その他	4 (5.9)		
	N. A.	2 (2.9)		

2　調査方法

質問紙による一斉施行方式

3　調査時期

昭和61年7月中旬および10月初旬

4　回収状況

回収数 123票，回収率 100%

5　調査項目

1）各生活場面において考慮する着装基準

中川（1986）は8生活場面における着装基準について報告しているが，本研究では，T短大については「A.家でくつろいでいる時」「B.同性の友人と繁華街へショッピングや食べ歩き，映画などを見に出かける時」「C.デートをする時」「D.通学の時」「E.結婚披露宴など改まった会に出席する時」の5場面，A短大については「F.通勤の時」を加え，6場面を設定した。

着装基準項目は表2に示す通りである。

表2　着装基準項目

a．洗濯や手入れが簡単な衣服である。
b．肌ざわや着心地が良い衣服である。
c．周囲の人と同じような傾向の衣服である。
d．周囲の人に対して儀礼や品位を表わした衣服である。
e．その場における自分の立場にふさわしい衣服である。
f．デザインがその場の雰囲気に合った衣服である。
g．周囲の人(その場にいる人や友人・恋人)に好ましく思われるような衣服である。
h．デザイや素材が流行している衣服であ。
i．自分の好きなデザインの衣服である。
j．自分をひきたて、できるだけ目立つような衣服である。
k．いつもの自分とは違う自分を演出できるような衣服である。

着装基準項目は中川（1986）の報告に準拠し，３因子に分類した。すなわちａ，ｂは実用性因子，ｃ～ｇは社会性因子，ｈ～ｋはファッション性因子である。

2）衣服関心度合

神山（1983）は因子分析により，「Ⅰ.個性を高める」「Ⅱ.心理的安定感を高める」「Ⅲ.似合いのよさを探求する」「Ⅳ.同調を計る」「Ⅴ.快適さを求める」「Ⅵ.理論づけを計る」「Ⅶ.慎みを求める」「Ⅷ.対人的外観を整える」の８次元からなる48の質問項目を，衣服関心度合測定項目として設定している。衣服関心度合測定項目の作成は，藤原（1982）らも行っているが，本研究では神山の作成した項目を用い，５段階評価による衣服関心度合の測定を行った。但し，測定項目の表現方法については，若干の変更を行ったものもある。測定項目は表３に示した。

表３　衣服関心度合の次元と測定項目

Ⅰ．個性を高める次元 1.　私は新しいファッションの衣服を誰よりも先に着たい。 2.　私は、自分の洋服ダンスには最新スタイルの衣服をそろえるように心がけている。 3.　私は新鮮なファッションを求めて繁華街に出かける。 4.　私は皆が着ていないような衣服を買うよう心がけている。 5.　他の人の衣服とは違ったものであるという気分にさせてくれない衣服は着用しないことがある。 6.　たとえ人目を引くとしても私は他の人が持っていないような独特なデザインの衣服を選ぶ。
Ⅱ．心理的安定感を高める次元 7.　衣服の種類によっては、私に、より一層の自信を感じさせてくれるものがある。 8.　私は衣服によって、愛想よく、また開放的になることがある。 9.　私は最上(いっちょうら)の通学服(通勤着)を着ている場合と、そうでない場合とでは、自分の気分や行動に違いを感じる。 10.　私は自分の気分転換のために衣服を買う。 11.　私は、同じ衣服を２日連続して着ようとは思わない。 12.　私は、最上(いっさょうら)の通学服(通勤着)を着る時、より強い自信を感じる。
Ⅲ．似合いのよさを探求する次元 13.　私と友人とは、お互いの衣服が似合っているかどうかに気をくばる。 14.　自分自身を魅力的にみせるアクセサリーの組み合わせ方を研究する。 15.　私は衣服について新しい情報を得るために雑誌や新聞を読む。 16.　衣服とアクセサリーの組み合わせの効果を考えることに興味がある。 17.　たとえ友人の誰もが無関心であり、また自分自身しいて着用したいとは思わなくても、私は何が新しい流行の服なのかを知りたいと思う。 18.　新しい衣服を買う時、私はそれを試着する前にその服に似合いそうな多くのアクセサリーをさがしてみる。
Ⅳ．同調を計る次元 19.　私は、ある集まりに何を着てゆくかについて、自分が決める前に一緒に行く友人と打ち合わせをする。 20.　私は、たとえ自分にあまり似合いそうにないものであっても、多くの人が着用している衣服があれば、それを着る。 21.　私は自分のグループの中では、仲間意識をもつために仲間と同じような衣服をすることを心

がけている。
22. 特別の祝典などに出席する時、もし自分が持っている服が友人が着るだろうと思われるものと違ったタイプのものであるならば友人に合わせた新しい衣服を購入する。
23. 私は、たとえ自分に似合いそうにないものであっても、学校(職場)の仲間たちの間で流行している衣服を着用する。
24. 私は、新しい衣服を買う時、自分の友人が着用しているものと似たものを買うよう心がけている。

Ⅴ. 快適さを求める次元
25. 私は、衣服の肌触りを重視する。
26. 私には特に好きな、また買いたいと思う特定の風合い—例えば、ソフトな、毛羽だった、こしの強い、なめらかな—の布がある。
27. 私は、たとえ自分の気に入った衣服であっても、それが快適でないならば着用しない。
28. 私は上腕を圧迫するような衣服の着用はさける。
29. 私は、もし自分の衣服が快適でないならば落ち着かない。
30. 私は、自分の着る衣服の風合いに非常に敏感である。

Ⅵ. 理論づけを計る次元
31. 私はなぜ人々がそれぞれ思い思いの衣服を着るのか知りたい。
32. 私は、快適な衣服とそうでない衣服があるのはどうしてであろうかと思う。
33. 私は、なぜ非常に変わった衣服を着る人がいるのか興味深く思う。
34. 私は衣生活において、どのようにすれば最大限、時間、エネルギー、金銭を節約できるのか知りたい。
35. 誰かが学校(職場)にあまり似つかわしくない服装でやってくる時. 私は何故その人がそのような服装をしてきたのか知りたく思う。
36. 私は、何故衣服によって気分が変わることがあるのか不思議に思う。

Ⅶ. 慎みを求める次元
37. 薄物の透けたドレスやブラウスは、体をあまりにもあらわしすぎると思う。
38. 私はファスナーをしめわすれているような人を見た時、不快感を覚える。
39. 私は、えりぐりを深くカットした衣服を着ている人を見ると、恥ずかしさを覚える。
40. 私は、あまりにも体にぴったりとした衣服を着ている人をみると恥ずかしさを覚える。
41. 私は、あまりにも体をあらわにしすぎるような衣服を着ている人とは近づきになりたくない。
42. 私は、何故不謹慎な衣服を着る人がいるのか疑問に思う。

Ⅷ. 対人的外観を整える次元
43. 私は、シーズンの過ぎた衣服がきちんと洗濯・保管されているかどうかに気をくばる。
44. 私は、(オーバーブラウスではない)ブラウスの裾が絶えず出て、うまくおさまらないような時は、わずらわしさを感じる。
45. 私は自分の衣服を選ぶ場合には服のもつ外観から、それがどのような素材でできているのかを考える。
46. 私は雨模様の日には、衣服が濡れるのを防ぐためにレインコートを着るか、傘を持つかする。
47. 私は、いつも自分の靴をきれいにしている。
48. 私は自分の着る服とアクセサリーとがうまく調和するように注意している。

3) 自己概念

自己概念の測定は菅(1975)の設定した測定項目をそのまま用い、現実自己と理想自己につ

いて positive な側の極を7とし，negative な側の極を1として7段階評価をさせた。

自己概念測定項目は表4に示した。

表4　自己概念測定項目

体格がよい	――――	体格がよくない
人のために尽くす	――――	人のことはかまわない
頭がよい	――――	頭がわるい
楽観的である	――――	悲観的である
努力家である	――――	なまけものである
服のセンスがよい	――――	服のセンスがわるい
学習成績がよい	――――	学習成績がわるい
人柄がはっきりしている	――――	人柄にムラがある
運動能力が優れている	――――	運動能力が劣っている
女らしい	――――	女らしくない
社会のきまりを重んでる	――――	どこまでも自分の要求を通そうとする
気持ちがいつも落着いている	――――	気持ちに落着きがない
融通がきく	――――	融通がきかない
顔がきれいである	――――	顔がきれいでない
計画性がある	――――	計画性がない
手先が器用である	――――	手先が不器用である
敏速である	――――	のろまである
いつも活気にあふれている	――――	いつも無気力である
正義感にもえている	――――	事なかれ主義である
趣味が広い	――――	趣味が乏しい
自分を幸福だと思う	――――	自分を幸福だと思わない
機転がきく	――――	機転がきかない
外向的である	――――	内向的である
人の評判を気にしない	――――	人の評判を気にする
地味である	――――	派手である
行動力がある	――――	行動力がない
気がやさしい	――――	気がきつい
開放的である	――――	開鎖的である
はっきりした自分の考えを持っている	――――	はっきりした自分の考えを持っていない
スタイルがよい	――――	スタイルがわるい
自分に自信がある	――――	自分に自信がない
社交的である	――――	非社交的である
人からよく理解される	――――	人からあまり理解されない
たいていの人とうまくやっていける	――――	あまりうまくやっていけない
友人が多い	――――	友人が少ない
異性に人気がある	――――	異性に関心を持たれない
年長者から可愛がられる	――――	年長者から可愛がられない
陽気である	――――	陰気である
大胆である	――――	臆病である
学校生活を楽しんでいる	――――	学校生活を楽しんでいない
人にすかれる	――――	人にすかれない
人に信頼される	――――	人に信頼されない
多くの人の前でも平気	――――	多くの人の前であがる
親友がいる	――――	親友がいない

4)　その他の項目

1箇月当りの衣服費について調査した。

Ⅲ 結果と考察

1　各生活場面において考慮する着装基準

図1は生活場面別に考慮する着装基準を選択（複数可）させ，その選択率を示したものである。A短大とT短大の間にはほとんど差は認められなかったので，一括して示した。

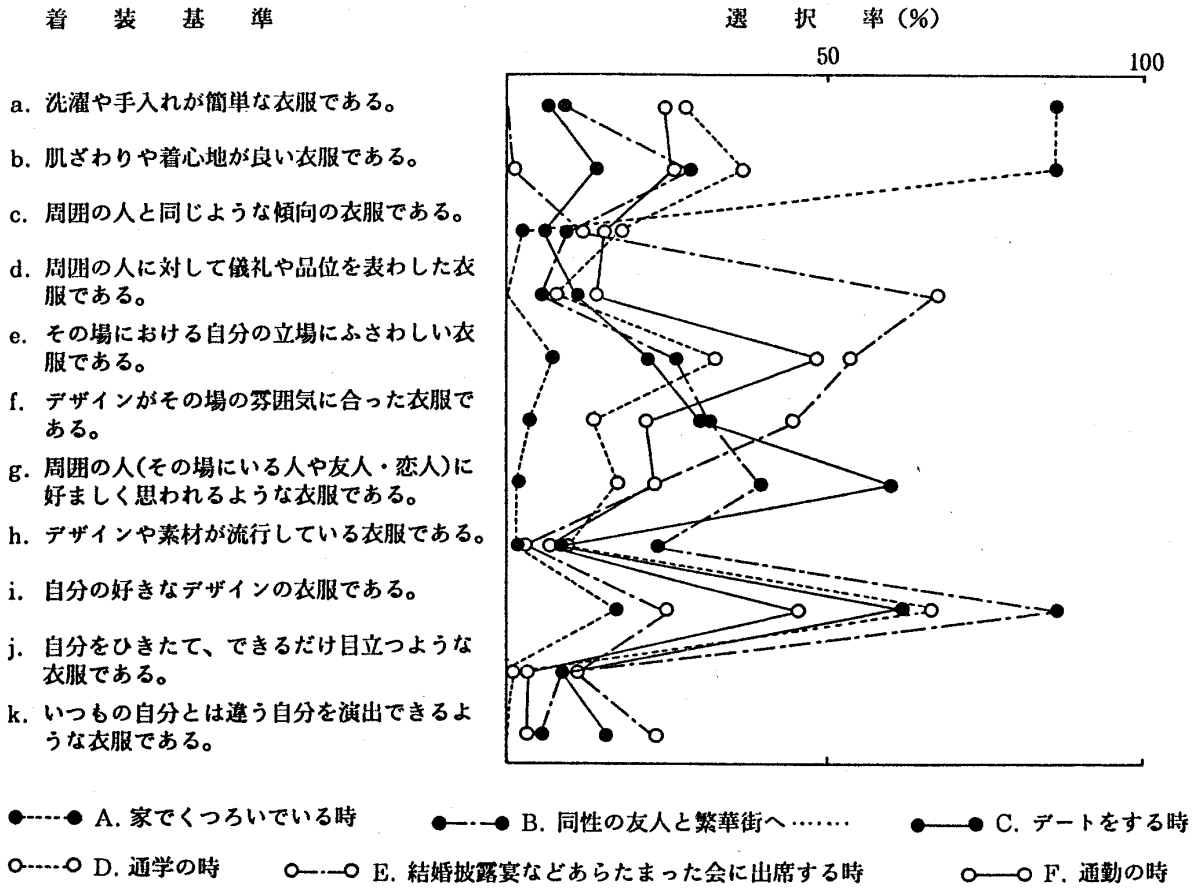

図1　生活場面別にみた着装基準の選択率

なお，「F．通勤の時」はA短大のみの結果である。

「A．家でくつろいでいる時」は，「a．洗濯や手入れが簡単な衣服である」「b．肌ざわりや着心地がよい衣服である」といった実用性を考慮し衣服を選択する者が多く，他の基準を選択する者は極めて少なかった。

「B．同性の友人と繁華街へショッピングや食べ歩き，映画などを見に出かける時」は「i．自分の好きなデザインの衣服である」を選択する者が約90%と多く，次いで「g．周囲の人に好ましく思われるような衣服である」「f．デザインがその場の雰囲気に合った衣服である」を選択する者が30～40%であった。

「C．デートをする時」は「g」と「i」がほぼ同様の率で選択されており，特に「g」は

他の生活場面よりも選択率が高いという結果であった。

「D．通学の時」は「i」の選択率が高くその他には「e．その場における自分の立場にふさわしい衣服である」「a」「b」がやや高い傾向にあった。

「E．結婚披露宴など改まった会に出席する時」は「d．周囲の人に対して儀礼や品位を表した衣服である」「e」「f」が，他の生活場面に比べ高い選択率を示した。

「F．通勤の時」は「D」と同じような傾向を示したが，「D」に比べ「e」の選択率が高く，「i」は低かった。

中川（1986）の報告は評価方法が異なるため，本調査と単純に比較することはできないが，「E」において「i」の選択率（中川は得点）が，中川の報告では高く，本調査では低い以外は，ほぼ同様の傾向にあった。

以上の結果から，他者を意識しなくてもよい場面では実用性を重視し，結婚披露宴のように公的で改まった場面では，自己主張よりも他者との調和を重視し衣服を選択するなど，生活場面により着装基準に差のあることが確認された。すなわち，衣服は各生活場面に対する着用者の考えが反映されるものであり女子短大生にとり，衣服は自己表現の手段の1つであるといえよう。

次に実用性，社会性，ファッション性の3因子が，5つの生活場面でどの程度選択されたかを表5に示した。「F」はA短大のみの調査であるため除外した。

表5　生活場面における着装基準因子の出現数

人数、（　）内は%

生活場面数	着装基準因子		
	実用性	社会性	ファッション性
5　場　面	1 (0.8)	10 (8.5)	15 (12.8)
4　場　面	16 (13.7)	44 (37.6)	23 (19.7)
3　場　面	5 (4.3)	27 (23.1)	37 (31.6)
2　場　面	34 (29.1)	23 (19.7)	27 (23.1)
1　場　面	60 (51.3)	12 (10.3)	11 (9.4)
0　場　面	1 (0.8)	1 (0.8)	4 (3.4)

この結果を x^2 検定により検討したところ，3因子間に1%水準で有意差を認めることができた（$x^2=112.180$　$df=10$）。そこで2因子ごとに x^2 検定を行った。

実用性因子と社会性因子の間には1%水準（$x^2=69.678$　$df=5$）で，実用性因子とファッション性因子の間にも1%水準（$x^2=74.307$　$df=5$）で有意差が認められた。また，社会性因子とファッション性因子では5%水準で有意差（$x^2=11.308$　$df=5$）を認めることができた。これらの検定結果から，最も多くの生活場面で選択された因子は社会性因子であり，次いでファッション性因子であることがわかった。ファッションの時代といわれる今日でも，衣服

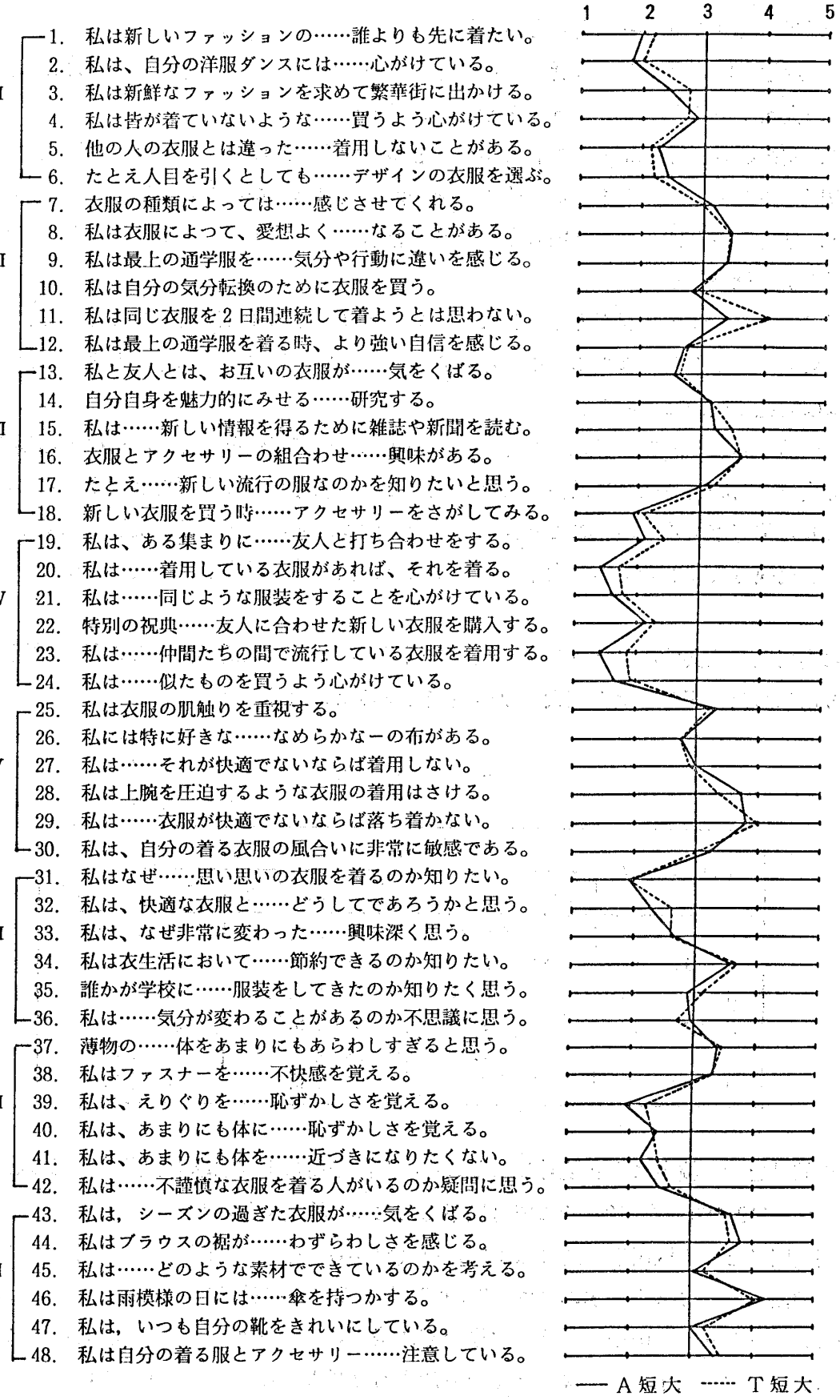

図2　衣服関心度合測定項目への反応得点

は対人関係を整える重要な手段として利用されているといえよう。

2　衣服関心度合

図2は衣服関心度合を測定する48項目について，「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「それに近い」「そのとおり」の5段階で評価をしてもらい，「あてはまらない」から「そのとおり」まで順に1点から5点を配点し，その平均点を学校別にプロットしたものである。

これを次元別にみると「Ⅰ．個性を高める」「Ⅳ．同調を計る」の項目は，すべて「あてはまらない（1）」「あまりあてはまらない（2）」の『否定』の方向に反応を示している。逆に「それに近い（4）」「そのとおり（5）」の『肯定』の方向にすべての項目が反応を示したのは「Ⅷ．対人的外観を整える」であった。すなわち，本研究の被調査者は衣服によって個性を高めることに対しては肯定的ではないが，友人と似かよった服装をすることに対しても否定的な傾向にある。

次に学校間で各項目の平均得点に差があるかをt検定により検討した。「11．同じ衣服を2日間連続して……」（$t=2.980$　$df=121$）、「23．たとえ自分に似合いそうにないものであっても学校の仲間たちの間で流行している……」（$t=3.119$　$df=121$）に1％水準で，「20．た

表6　次元別、学校別にみた衣服関心度合評定段階への反応数

人数、（　）内は％

次元	学校	評定段階				
		1	2	3	4	5
Ⅰ	A	116 (29.3)	131 (33.1)	93 (23.5)	34 (8.6)	22 (5.5)
	T	85 (24.8)	106 (31.0)	108 (31.6)	38 (11.1)	5 (1.5)
Ⅱ	A	52 (13.2)	77 (19.5)	85 (22.0)	113 (28.6)	66 (16.7)
	T	31 (9.1)	54 (15.8)	102 (29.8)	101 (29.5)	54 (15.8)
Ⅲ	A	72 (18.3)	83 (21.1)	95 (24.1)	94 (23.8)	50 (12.7)
	T	47 (13.7)	71 (20.8)	92 (26.9)	95 (27.8)	37 (10.8)
Ⅳ	A	214 (54.0)	99 (25.0)	60 (15.2)	22 (5.5)	1 (0.3)
	T	108 (31.6)	126 (36.8)	68 (19.9)	34 (9.9)	6 (1.8)
Ⅴ	A	33 (8.3)	64 (16.2)	114 (28.9)	119 (30.1)	65 (16.5)
	T	32 (9.4)	57 (16.7)	106 (31.0)	98 (28.6)	49 (14.3)
Ⅵ	A	90 (22.7)	99 (25.0)	95 (24.0)	58 (14.7)	54 (13.6)
	T	72 (21.1)	74 (21.7)	84 (24.6)	79 (23.2)	32 (9.4)
Ⅶ	A	91 (23.0)	97 (24.6)	103 (26.1)	73 (18.5)	31 (7.8)
	T	61 (17.9)	67 (19.6)	126 (36.9)	66 (19.4)	21 (6.2)
Ⅷ	A	35 (8.8)	55 (13.9)	85 (21.5)	113 (28.5)	108 (27.3)
	T	17 (5.0)	51 (15.0)	82 (24.0)	120 (35.2)	71 (20.8)

注）反応数は各次元とも6項目の反応合計数である。

とえ自分にあまり似合いそうにないものであっても，多くの人が着用している……」（t＝2.378　df＝121）に5％水準で有意差が認められたが，それ以外の項目には有意差は認められなかった。

また表6に示すように，次元別に衣服関心度合に対する反応と学校の関係を求め，x^2検定をしたところ，「Ⅰ」（x^2＝15.596　df＝4）、「Ⅳ」（x^2＝41.046　df＝4）は1％水準で，「Ⅵ」（x^2＝11.093　df＝4）、「Ⅶ」（x^2＝12.098　df＝4）、「Ⅷ」（x^2＝10.247　d＝4）は5％水準で有意差を認めることができた。「Ⅳ」はT短大の方が「そのとおり（5）」に反応した者が多く，「Ⅰ」「Ⅵ」「Ⅶ」「Ⅷ」はA短大の方に「そのとおり（5）」に反応した者が多い。「Ⅰ」「Ⅳ」「Ⅵ」「Ⅶ」「Ⅷ」のいずれも「あてはまらない（1）」に反応した者はA短大に多くみられた。すなわちA短大は両極への反応がT短大に比較し多いことがわかった。

3　自己概念

図3は現実自己と理想自己のそれぞれについて、学校別に各項目の平均得点をプロットしたものである。

現実自己では，A短大よりT短大の方が全体に得点は低く，特に「頭がよい――わるい」「学習成績がよい――わるい」の項目は低い。

理想自己では両校の差は小さい傾向にあるが，「体格がよい――よくない」「人のために尽くす――人のことはかまわない」はT短大の得点がやや高く，「学校生活を楽しんでいる――いない」「人に信頼される――されない」「多くの人の前でも平気――あがる」はA短大の方がやや高い。

現実自己と理想自己の差の特に大きな項目は「学習成績がよい――わるい」「顔がきれいである――ない」「スタイルがよい――わるい」であり，その差は3点前後であった。学校別ではT短大が「頭がよい――わるい」「服のセンスがよい――わるい」「学習成績がよい――わるい」「顔がきれいである――ない」「スタイルがよい――わるい」の5項目で3点前後の差があるのに対し，A短大は「スタイルがよい――わるい」の1項目のみであり，全体的にもT短大の方が差の大きい傾向にある。これは先にも述べたように，T短大の現実自己の得点が低いためである。

4　着装基準と衣服関心度合の関係

衣服関心度合の48項目の反応得点を合計し，その平均得点と標準偏差を用いて，上下各25％の範囲にあるものを，それぞれ得点上位者，下位者とし，その他を中位者として衣服関心度合による被調査者の類型化を行った。

この類型を用い，衣服関心度合の類型と各生活場面における着装基準因子の選択の状況を表7に示し，x^2検定を行った。

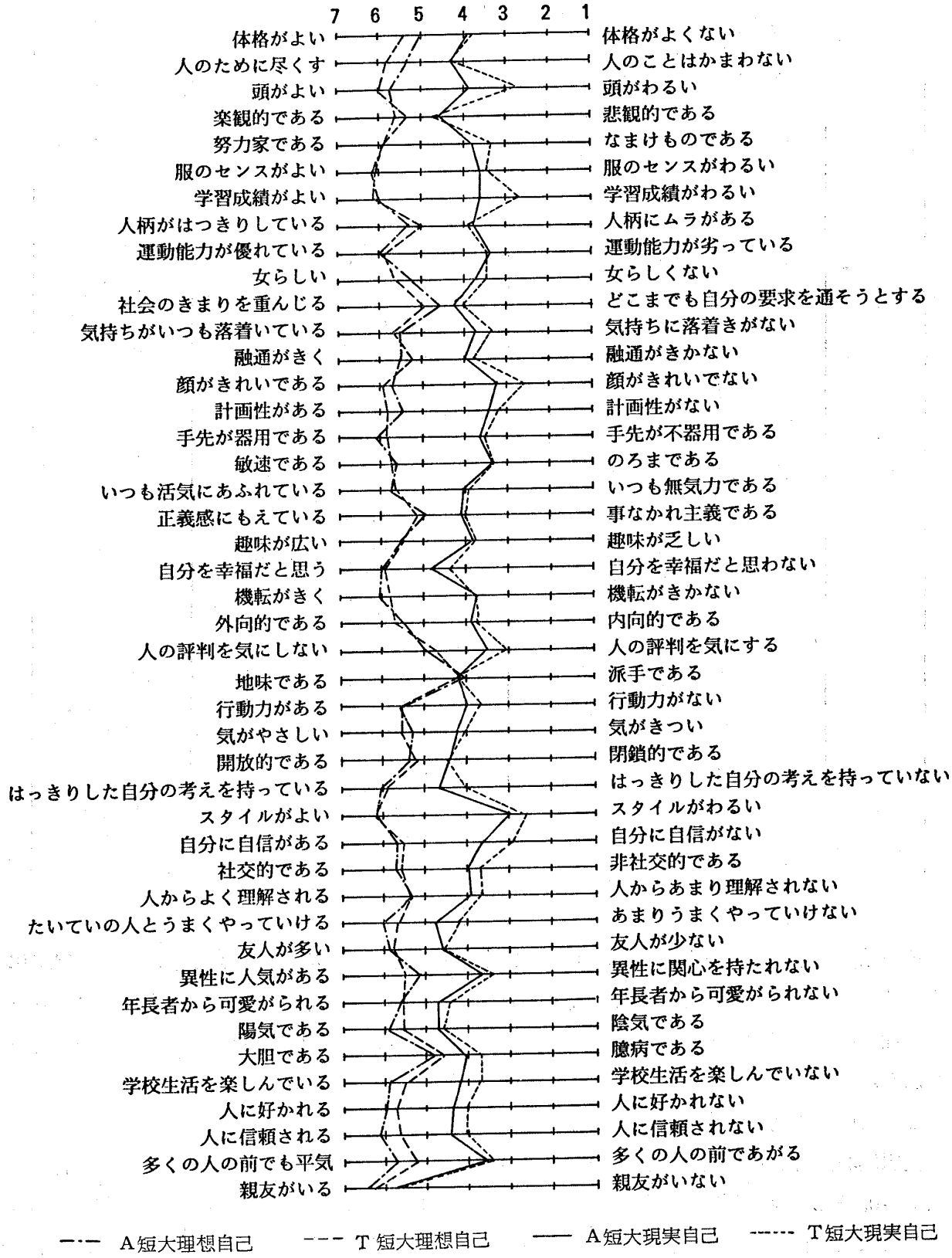

図3　自己概念測定項目に対する反応得点

表7　生活場面および衣服関心度合の類型別にみた着装基準因子の選択の仕方

人数、（　）内は%

生活場面	着装基準因子の選択の仕方	衣服関心度合の類型		
		上位	中位	下位
A	実用性のみ	20 (66.7)	44 (80.0)	24 (80.0)
	社会性のみ			
	ファッション性のみ			
	2因子以上	10 (33.3)	11 (20.0)	6 (20.0)
B	実用性のみ			
	社会性のみ	1 (3.3)	4 (7.3)	2 (6.9)
	ファッション性のみ	11 (36.7)	11 (20.0)	13 (44.8)
	2因子以上	18 (60.0)	40 (72.7)	14 (48.3)
C	実用性のみ			
	社会性のみ	4 (14.3)	10 (18.9)	10 (34.5)
	ファッション性のみ	3 (10.7)	5 (9.4)	9 (31.0)
	2因子以上	21 (75.0)	38 (71.7)	10 (34.5)
D	実用性のみ	2 (6.7)	2 (3.7)	3 (10.4)
	社会性のみ	5 (16.7)	5 (9.2)	6 (20.7)
	ファッション性のみ	10 (33.3)	11 (20.4)	5 (17.2)
	2因子以上	13 (43.3)	36 (66.7)	15 (51.7)
E	実用性のみ			
	社会性のみ	14 (46.7)	34 (61.8)	22 (73.3)
	ファッション性のみ	1 (3.3)	1 (1.8)	2 (6.7)
	2因子以上	15 (50.0)	20 (36.4)	6 (20.0)
F	実用性のみ	1 (8.3)	3 (10.0)	1 (5.9)
	社会性のみ	3 (25.0)	11 (36.7)	6 (35.3)
	ファッション性のみ	1 (8.3)	3 (10.0)	1 (5.9)
	2因子以上	7 (58.4)	13 (43.3)	9 (52.9)

注）　FはA短大のみの結果である。

その結果，「C．デートをする時」に1％水準で有意差を認めることができた（$x^2=14.316$ $df=4$）。すなわち，衣服関心度合の高い者ほど，単一の着装基準ではなく，社会性とファッション性といった複数の因子を選択する者が多いといえる。その他の生活場面では有意差は認められなかった。

5　衣服関心度合と自己概念の関係

衣服関心度合と自己概念の相関関係を検討したところ，現実自己（$r=0.1109$）、理想自己（$r=0.1882$）、現実自己と理想自己の差（$r=0.0903$）のいずれとも相関は認められなかった。また現実自己のうち，衣服に関連があると考えられる16項目を選定し，これについても相関をみたが，相関は認められなかった。（$r=0.1523$）。

6　1箇月の衣服費と衣服関心度合の関係

1箇月当りの衣服費を学校別に表8に示した。

表8　1 箇 月 の 衣 服 費

衣　服　費	A 短 大	T 短 大	計
1 万 円 未 満	21 (31.8)	18 (31.6)	39 (31.7)
1万円以上、2万円未満	22 (33.3)	21 (36.8)	43 (35.0)
2 万 円 以 上	13 (19.7)	9 (15.8)	22 (17.9)
不 明、N. A.	10 (15.2)	9 (15.8)	19 (15.4)

両校とも1万円以上2万円未満が多く，衣服費については似かよった傾向を示した。

次に，学校別，衣服費別に衣服関心度合項目への反応得点を表9に示し，表10にt検定による衣服費と衣服関心度合の差の検定結果を示した。

表9　学校別・1箇月の衣服費別にみた衣服関心度合測定項目への反応合計得点

衣　服　費	得点					
	A 短 大			T 短 大		
	$\bar{x}$	σ	n	$\bar{x}$	σ	n
1 万 円 未 満	120.35	20.033	20	137.19	14.875	16
1万円以上、2万円未満	136.76	13.714	21	136.52	22.079	21
2 万 円 以 上	150.91	19.846	11	148.11	13.386	9

表10　学校別にみた1箇月の衣服費による衣服関心度合の差の検定

衣　服　費	A 短 大		T 短 大	
	t	df	t	df
1万円未満　対　1万円以上、2万円未満	2.997※※	39	0.101	35
1万円未満　対　2万円以上	3.943※※	29	1.750	23
1万円以上、2万円未満　対　2万円以上	2.288※	30	1.414	28

※※ $p < 0.01$　※ $p < 0.05$

T短大では差は認められなかったが，A短大では衣服費が多いほど衣服関心度合も高くなるという結果が得られた。

A短大は職業をもっている者が多いことから，T短大に比較し経済的に豊かであると考えられる。したがって衣服に関心があればより多くの衣服費を使うことも可能である。これに対し，T短大は職業をもたないため，経済的に自由ではなく，衣服にお金をかけたくともかけられない現状であると考えられ，こうしたことから学校間に差が認められたのであろう。

Ⅳ おわりに

自己表現と衣服の関連について，各生活場面における女子短大生の着装基準，衣服関心度合，自己概念を通して検討してきた。

その結果，着装基準については生活場面により基準の選択に差が認められ，衣服は女子短大生にとり各生活場面での自己表現の手段の1つとなっていることを確認した。

衣服関心度合では，衣服によって個性を高めようとは思わないが，他者と似かよった服装も好まないという複雑な心理をみることができた。また衣服によって対人的外観を整えることには肯定的であり，先の着装基準においても社会性因子が最も多くの生活場面で選択されていることを考えあわせると，衣服は対人関係の安定を得る手段となっていることがわかった。

衣服関心度合と自己概念の関係は藤原（1982）らも報告しており，藤原は両者（藤原は自己概念という言葉ではなく，自己概念の評価が自己に肯定的であるか，否定的であるかの観点から自尊感情という言葉を用いている）に相関を認めている。しかし本研究では相関を認めることはできなかった。

この原因を特定することはできないが，衣服関心度合，自己概念を測定する尺度の異なることが原因の1つとして考えられる。今後は尺度自体の検討が必要であろう。

本調査を行うにあたり，ご指導下さいました愛知県立大学教授青木民雄先生，ならびにご協力いただいた学生諸姉に深謝いたします。

参考文献

中川早苗（1986）「衣生活システムの理論的、実証的研究（第3報）女子大生の生活場面と着装基準に関する研究」家政学雑誌 Vol.37 No.5 83～89

藤原康晴（1982）「女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係」家政学雑誌 Vol.33 No.10 36～40

神山　進（1983）「被服関心の概念とその測定――ギュレルの研究の追試――」繊維製品消費科学 Vol.24 No.1 35～41

菅　佐和子（1975）「Self-Esteem と対他者関係に関する研究――青年期を対象として――」教育心理学研究 Vol.23 No.4 19～24